

平成18年度
発生予察情報

特殊報第2号

平成19年1月25日発行
宮城県病害虫防除所
(TEL:022-275-8982)

キクわい化病（キクわい化ウイルス）の発生について

ウイルスとは：

ウイルスよりも小さく、塩基数200～400程度の環状の一本鎖RNAで構成されている。また、ウイルスと違い、外被たんぱく質をもたない。熱や紫外線に対して比較的安定している。
ウイルスに感染した植物は、退色、わい化など様々な症状が現われる。

1 発生の経緯

近年、県内においてキクのわい化症状を示す個体が確認されていた。このため、平成18年に宮城県農業・園芸総合研究所 バイオテクノロジー開発部で遺伝子診断を行った結果、平成15年から県内各地で収集したわい化症状・生育異常を示していたキクから、キクわい化ウイルス(CSVd)が検出され、キクわい化病であることが確認された。

本病は、昭和57年静岡県で初めて確認され、その後、全国的に発生が拡大しているが、本県における本病の報告は今回が初めてである。

2 発生状況および病徴

- (1)発生作物 キク
- (2)病害名 キクわい化病
- (3)栽培様式 施設栽培、露地栽培
- (4)病徴
 - ・葉は小型化し、葉縁が下方に巻き、茎の節間が短縮して草丈が短くなる。
 - ・葉はわずかに退緑化し、茎との角度が小さくなり、直立して生育する傾向がある。
 - ・健全株よりも開花が早まる(7～10日)傾向がある。

3 病原体の性質と伝染

- (1)病原体 キクわい化ウイルス(*Chrysanthemum stunt viroid* ; CSVd)
- (2)寄主範囲 キク科植物
- (3)発現温度 病徴は高温期(26～29℃)に現れやすく、汁液接種で1～2か月、接木接種で20～30日を要する。低温、弱光下では病原ウイルスが増殖しにくく、キクが感染していても病徴が現れにくい。
- (4)感染時期 本病は、幼苗時に感染が起こりやすい。罹病株の残さが混入した用土で育苗したり、苗の植え付け時に、罹病苗の根と健全苗の根が接触すると伝染する可能性がある。
- (5)伝染方法 主に汁液伝染によるものであり、虫媒伝染、土壌伝染は認められていない。
- (6)伝染源 主要な伝染源は、罹病ギク(病徴が現れていない株も含む)であり、罹病株の摘蕾、切花、台刈りなどの作業時に刃物を介して伝染する。

4 防除対策

～ 薬剤による防除は困難なため、以下のような耕種的防除を行う ～

- (1) 罹病苗をほ場に持ち込まないことが最も重要である。病徴が認められたほ場では、親株を更新する。
- (2) 育苗時には、罹病株の残さが混入している土壌は用いず、苗同士の根の接触の少ない育苗(セル成形苗など)を行う。
- (3) 発病がみられた株は速やかに抜き取り、適正な処理(土中深くに埋める、焼却処分する、袋等で密閉して腐敗させる、など)を行う。
- (4) 作業時には、頻繁にハサミを替えるか消毒することにより、汁液伝染を防ぐ。
- (5) 無病徴でも感染している可能性があるため、新しく導入した品種などは取り扱いに注意する。